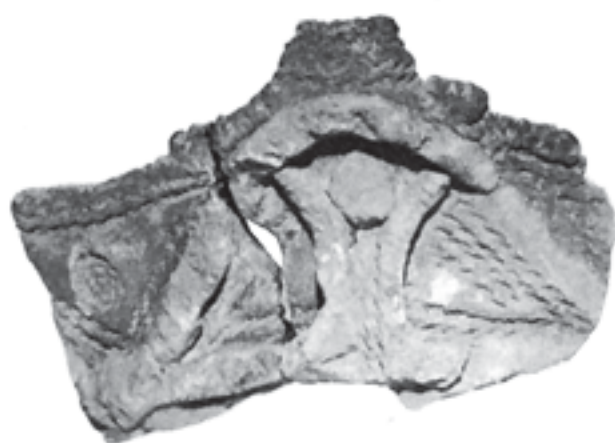


青森市の埋蔵文化財 5

野木和遺跡調査報告書



青森市教育委員会

発掘地点遠景



前方かすかに青森湾が見える
(南西より望む)



(北東丘陵背より望む)

青森市の埋蔵文化財 5

野木和遺跡調査報告書

目 次

序.....	3 頁
野木和遺跡調査報告.....	6 頁
はじめに.....	6 頁
遺跡の位置.....	7 頁
発掘経過.....	7 頁
地 層.....	9 頁
考 察.....	9 頁
出土遺物.....	10 頁
土 器.....	11 頁
土 偶.....	13 頁
石 器.....	13 頁
出土土器の編年.....	14 頁
発掘参加者一覧.....	16 頁
図 版.....	17 頁
写 真.....	23 頁

序

文化財保護法が、先人の貴重な遺産である文化財を保存し、その活用を図り、国民の文化的向上に資するとともに世界文化の進歩に貢献することを目的として、昭和25年に制定されて以来20有余年経過してまいりました。その間我が国に於ける文化財保護のための諸事業は飛躍的な発展をとげてきたことは誠に喜ばしい限りであります。

しかし、その反面近年のめざましい開発事業の発達に伴ないあらゆる方面から文化財に対する危機がさげばれてきております。

現代に生きるわれわれはかけがえのない文化財を永く後世に伝え保存するとともに、これを活用して文化の創造発展に役立てることを責務としなければなりません。

当教育委員会ではこれまでも市内に散在している古代の遺跡の発掘調査をして、その遺物を保存するとともにこれが記録を作成して、文化財保護と研究の資料の一助としてまいりました。

昭和43年度においても青森市文化財審議会および研究者や市内の高校生の協力を得て、野木和遺跡の発掘調査をおこないましたが、このたびその結果の報告書を刊行するはこびとなりました。

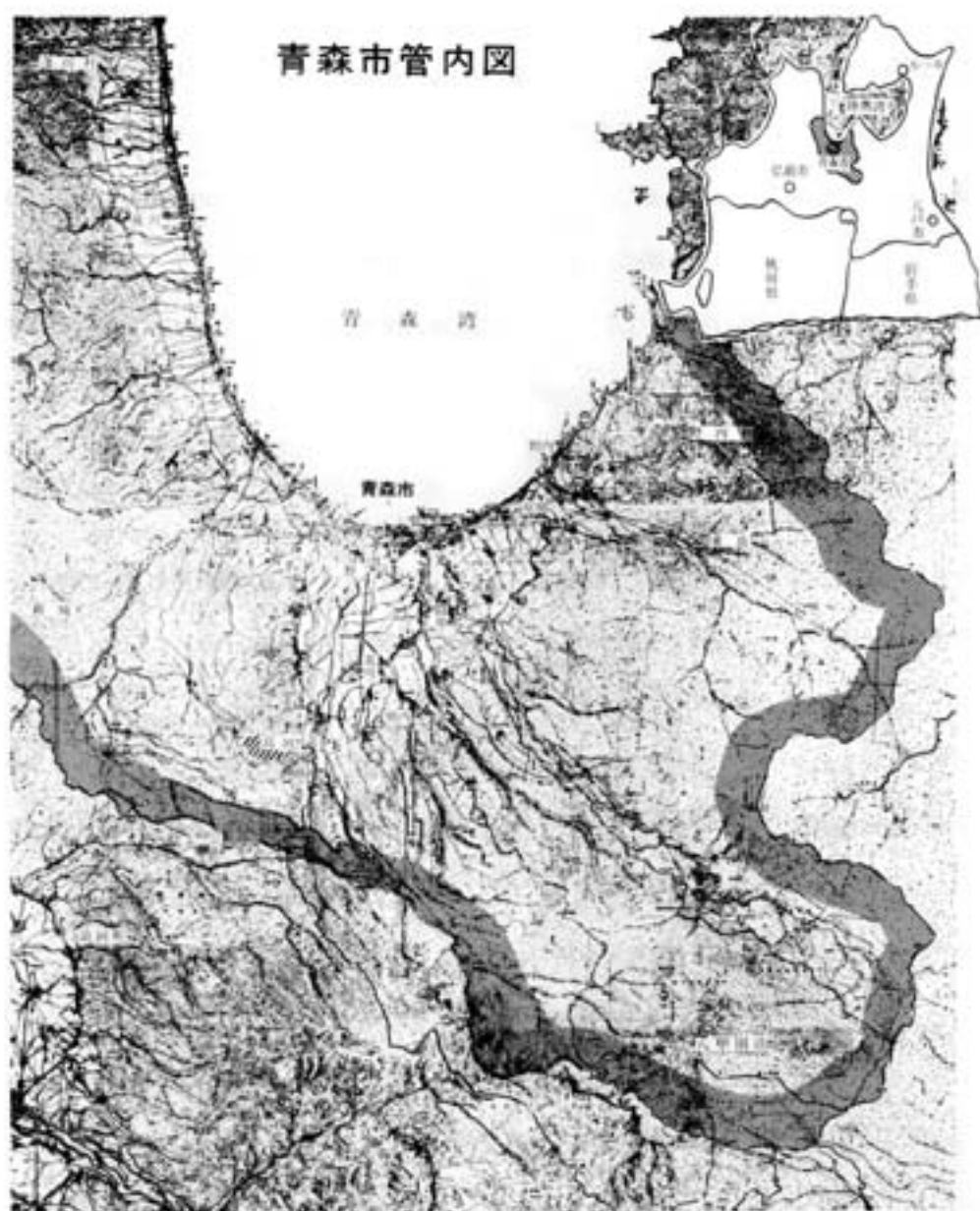
十分な成果をあげることはできませんでしたが、この小冊子が広く関係者の用に供されいささかでも文化財に対する正しい理解と関心を深めることに役立てば幸いであります。

本報告書の刊行にあたりこれまで多大のご協力とご指導をいただいた井上久、三宅徹也氏をはじめ多くの方々に深く感謝の意を表するものであります。

昭和46年3月

青 森 市 教 育 委 員 会

教 育 長 杉 田 貞 作



青森市管内図

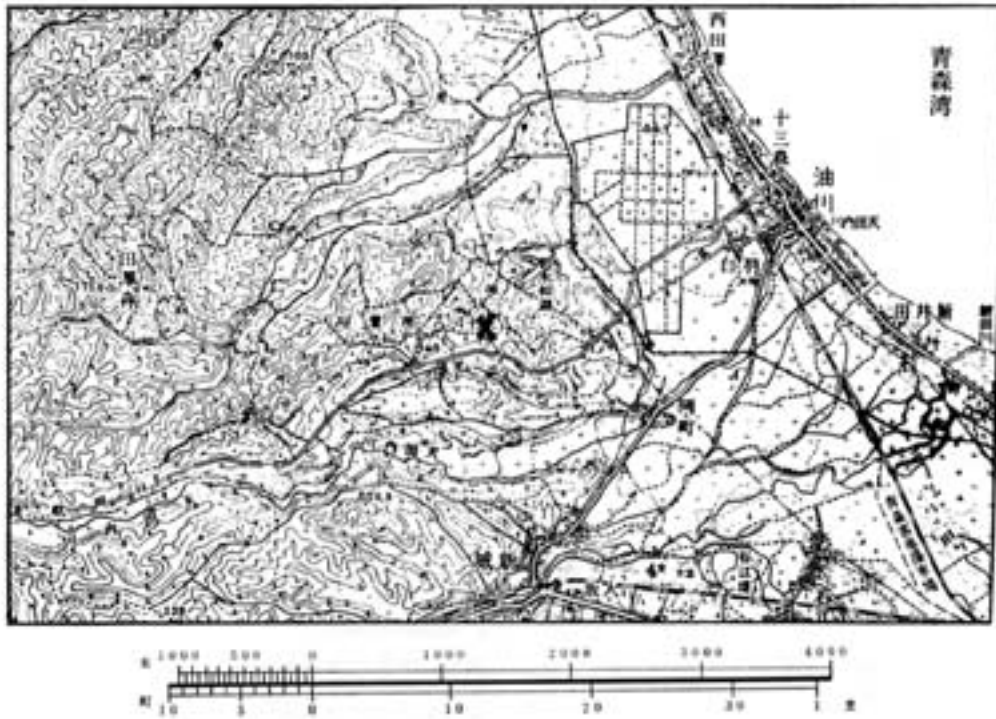
青森湾

青森市

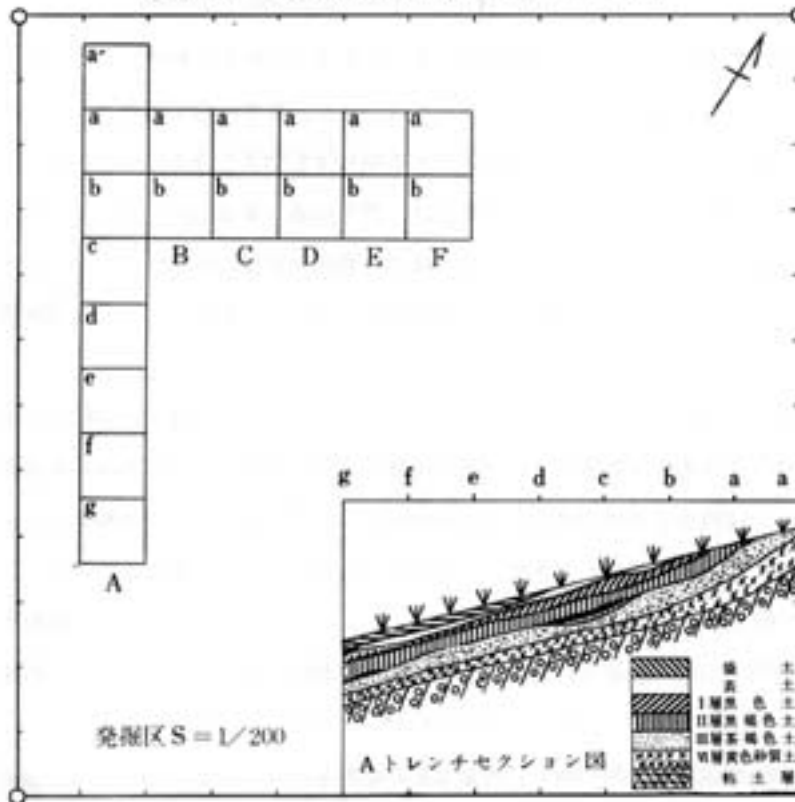
青森市役所作成

1/200,000

第1図 野木和遺跡附近地形図（×印野木和遺跡）



第2図 発掘区及びセクション図



野木和遺跡調査報告

はじめに

今回で8年目を迎えた青森市教育委員会による市内主要遺跡の発掘調査は、調査地を野木和遺跡と定めて実施されたが、ここにその調査結果について報告する。

この遺跡は、通称「横流れ」と呼ばれてきた山林であったが、戦時中の開墾によって起伏の激しい丘陵が切崩されて現在写真にみるような耕作地になったもので、その際に大量の土、石器が発見された処である。最近では附近一帯は大規模な農地改善による整地工事や土砂の採掘、あるいは心ない盗掘が行われ、遺物の散乱や遺跡の荒廃が甚だしく、このまま放置しておくで消滅してしまう心配も出てきた。そこで青森市教育委員会では、青森市文化財審議会の議を経てこの地の学術調査を緊急に行って、教育文化の研究に役立たせるため発掘を実施することにした。発掘担当者として

青森市文化財審議会委員	小	野	忠	明
同	井	上		久

の2名がその任に当ることになった。しかし、この中の小野忠明は勤務先の都合上、全面的な参加ができなかった。

発掘作業は、実習を兼ねて市内の高校生の手によって行うことにしたので、彼らの都合を考慮して夏季休暇中に実施する計画をたてたが、発掘担当者の都合により、夏季休暇中の発掘調査は不可能になった。このため、当地としては雪の降る前の連休のある昭和43年11月2日から5日までの4日間を調査期間とした。発掘調査主体の青森市教育委員会は、例年の通り事務局社会教育課長福井平内を先頭に、課員一同その総力をあげて発掘準備から終了後の事務的な処理の外に、写真撮影・発掘の実施まで、万端にわたってやすみなく活動を続けた。測量関係は中川秀夫を中一心とした市内高校OB陣がその任に当ることになった。

発掘作業は、県立青森高等学校・青森工業高等学校・青森商業高等学校・市立第一高等学校の郷土部または考古学関係クラブの指導教諭とクラブ員にお願いすることにしたが、今回から青森山田高等学校社会研究部員が、指導教師葛西励引率のもとに初参加した。県立青森西高等学校・市立中央高等学校は、学校側の事情で全面的な参加ができず、2日間または半日だけの参加にとどまった。

発掘調査期間中は長期の休暇中でほなかつたにもかかわらず、参加人員が多く、高校生は延174名に達した。晩秋には珍しいほどの好天に恵まれ、秋空の下で発掘作業と併行して出土品の水洗・整理も行なった。

今回もクラブの先輩諸氏の参加が多く、後輩生徒の指導上非常に役立ったことに感謝の意を表した

い。その他、青森市財政課長中村和夫・平内町の田中忠三郎等の諸氏も参加して下さった。またわざわざ見学に来られた青森市文化財審議会の肴倉弥八・板谷八郎・福井雄三の各氏、多数の教師・児童を引率して来られた市立油川小学校長の神精次郎、市立中央高等学校の秋元博善・野村俊夫・鈴木竜二、市立油川中学校の二唐唯七・井上正の諸先生、取材のため来訪された青森放送の佐藤、東奥日報の工藤の両氏、これらの方々に対して敬意を表したい。中には氏名の記録を失した方々もあると思うが、お許し願いたい。

遭跡の位置

野木和遭跡の所在地は青森市大字羽白宇野木和 58 番地 39 の畑地で、所有者は同市羽白字富田 16 番地の 1 の工藤吉郎氏（農業）である。青森市の市街地から油川町を経て、油川中学校わきから五所川原市へ抜ける県道（五所川原街道を西に向かい市営バス八十八か所停留所の少し先から北に入った右手で、南東に面した日当りのよい傾斜地一面が遺物包含地になっている。この中の北東側の落葉松植林地と、南西側のりんごに園に挟まれた地点が今回の調査地である。

地図で見ると、野木和湖のすぐ西の丘陵の背を越えた南側斜面で、丘陵の背に登って北東を見渡すと、油川町を眼下にして青森湾を一望のもとに見おろす風景のよい個所である。西側はぼん珠山（県民の森）のすそが五所川原街道までせまっていて、北西の季節風を阻ぎ、冬でも暮しやすい処だったろうと思われる。

青森市の市街地からは約 11km の距離にあり、標高は約 40m である。（第 1 図）

発掘経過

11月2日（土）快晴

社会教育課長福井平内のあいさつ、井上久の発掘作業上の諸注意の後、試堀の結果に基づき、南東に面した斜面に沿って 2m × 14m の A トレンチを設定し、これを 2m × 2m の小区に分けて Aa・Ab・Ac・Ad・Ae・Af・Ag の 7 区とした。斜面の上部はブルドーザーによって削土され、粘土層まで露出していたのでそれを避けた。

トレンチを設定した個所はりんご園の隣接地で、耕作もあまりしていなかったので表土はごく薄く、すぐ黒土層に入る。しかし斜面の下部には、上部から押流された黒土がかなり堆積されているようであった。午後になって Aa に続けて Aa 小区を設定した。この日の出土は土器類は皆無で、石鏃 2・磨製

石斧4・石ヒ2・刃器3・石錘1・加工軽石（うき？）1が記録された。いずれも第1層からの出土で、38～82cmの深さである。

この日は青森高・青森工業高・青森商業高・青森一高・山田高の5校から延45名の生徒が参加した。

11月3日（日）快晴

今日は日曜日なので参加人員が多く、小野忠明もこの日は終日調査に参加した。

昨日のトレンチを継続して発掘した結果、Aa・Abが一ばん出土品が多かったので、これを北東に10m延長することにした。この結果、2m×2mのBa・Bb、Ca・Cb、Da・Db、Ea・Eb、Fa・Fbの10区が新たに設定された。Aトレンチは黒土層は深かったが、完形土器1個を出土したのみである。Aa・Abとその延長の新設トレンチは、すぐ黒褐色の第1層に変わり、この土層から土器群・石器が次第に出土してきた。土器はすべて円筒上層式に属するものである。この日の出土品は復原可能と思われる円筒上層式深鉢形土器2体分と残片中量の外に、石鏃6、石ヒ3、爪形石器・石鏃・有孔石器・石槍各1、中期初頭の土偶下部1である。

この日は前日の5校に、青森西高が加わって延50名の生徒が参加し、トレンチは満員の大盛況になったので、半交代で出土品の水洗を行わせた。

11月4日（月）晴

A・B・C・D・E・Fの各トレンチを掘下げる。Aトレンチからは出土品が少なく、わずかにAbから復原可能と思われる土器群が1体分、Adから石鏃外2点の石器が掘りだされただけであった。しかしB・C・D・E・F各トレンチの第1層（黒褐色土）からは土器・石器が豊富に出土しはじめた。この日の出土品は円筒上層式深鉢形土器が2体分と残片多量、円筒下層式深鉢形土器1体分と残片少量、有孔円版1の外に石鏃6、石ヒ・刃器各3、石槍・加工軽石（うき？）・磨製石斧各2、爪形石器・石錐・凹石各1であった。Aトレンチは第1層（黒色土）が斜面の下の方ほど厚く、その下に第1層（黒褐色土）が現われ、それが第1層（茶褐色土）に変わったがこれは薄く、第1層（黄色砂質土）から粘土層に達していた。粘土層までAeの部分で170cmの深さであった。

参加校は前日の6校に午後から青森中央高が加わって、7校延39名である。またこの日は近くの市立油川小学校の上級生が、校長神精次郎氏以下3名の引率で発掘現場の見学におとずれ、にぎやかな一日になった。

11月5日（火）うすぐもり

3日間続いた晴天もどうやら崩れかけてきた。最終日の今日は前日に続いて各トレンチを掘下げる。A・B・C・D・E・Fのaとbトレンチは第1層の下に薄い火山灰層が断続し、その下は茶褐色土になっていて、次いで第1層から粘土層に達する。火山灰層が土器形式の境界になっているらしく、昨日

の円筒下層式土器はこの層の下から出土していたことがわかった。またAcからは表土から51～63cmの深さで、第 層中に厚さ9～11cmの粘土の床面らしいものが出土してきた。注意深く発掘してみたが、縦穴の床面としては形が不規則で、柱穴も確認できなかった。この粘土層の下はまた黒色土になっていたが、人工遺物は全く含まれていなかった。この日の出土品は、円筒上層式深鉢形土器3体分と石鏃4、刃器・研磨具各2、凹石1である。

参加校は青森西高・青森中央高の女子高校が不参加で、残りの5校の生徒延40名である。午後2時30分から埋戻しを行ない、4時に、4日間にわたる発掘調査を無事終了した。

地 層

発掘経過の中で述べたように、本遺跡の層位は第 . . . の4土層に大別することができる。表土は薄く第 土層の上を覆っていた。第 土層（茶褐色土）になると出土品は少なくなってきた。第 土層（黄色砂質土）には人工遺物は全く含まれていなかった。その下は粘土層である。したがって、第 . 土層が人工遺物を包含する中一心の土層ということになる。

第 土層（黒色土）は傾斜面の下の方ほど厚くなっていて、同時に下の方ほど攪乱が多かった。おそらく上の方の土がかなり流れているものと思われる。出土品は石器が多かったが、下の方は攪乱のためか、かなり遊離していた。土器類は第 層に比べては少なかった。またAcの部分を中心として、第 土層を掘下げて粘土を敷きつめた層の存在が認められ、その直下には黒色土が入込んでいた。この粘土を敷きつめた層は、住居址ではないかと思い精査したが、柱穴や炉跡等を発見することができず、住居址とは断定できなかった。

第 土層（黒褐色土）は割合に深く、土器・石器の出土も一ばん多い土層であった。この層の下部には、部分的に断続する薄い火山灰層があって、土器形式をわける境界の役目をしていた。

第 土層（茶褐色土）の火山灰層直下からは、前期の円筒下層式土器が出土している。

（第2図）

考 察一

縄文文化前期（円筒下層式）・中期（円筒上層式）の遺跡は、青森県全域にわたって多数存在し、その人工遺物の出土量もおびただしい。しかし開墾、公私の施設建設、採土等のために、多数の人工遺物を出土していながら消滅してしまった遺跡が多いのに比べ、正式な発掘調査を実施できた遺跡は少数である。

今後、縄文文化の前期・中期、後期の遺跡が数多く発掘調査され、報告書の公開を見て、比較研究が

行われ、編年がより充実できる日を望むものであるが、遺跡の破壊がより急速に進んでいるのを憂慮するものである。

さて、本遺跡から出土した土器を整理して編年してみた結果、われわれは次の4群7類に分類した。

群は円筒下層式で、従来の下層D式に相当するものであるが、本遺跡のものはさらにa・bの2類に細分できる。この群は層位では第 土層（茶褐色土）の上部から出土した。その上には断続した火山灰層があって第 土層（黒褐色土）になり、土器形式は 群に移行する。この群から円筒上層式になり、従来の上層A式に相当するものであるが、本遺跡のものはさらにa・b・Cの3類に細分できる。

この上には 群が重なっていたが、これは従来の上層B式に相当するものである。第 土層（黒色土）からは土器形式の 群が出土したが、これは十腰内 式に相当するものである。以上を整理すると次表のようになる。

野木和遺跡			従来の編年
出土層位	群	類	
III	I	円筒下層Da " Db	円筒下層D
II	II	円筒上層Aa " Ab " Ac	円筒上層A
	III	円筒上層B	円筒上層B
I	IV	(類名未定)	十腰内 I

本遺跡では、この4群7類が層位的に連続して出土する点に特色があり、時代推定のポイントになるものといえよう。しかし果樹園造成の際の整地で、傾斜面の上部が粘土層まで剥土されていた上に、中部の第 土層にも、おそらく同じ時に行れたと思われる攪乱のため、遂に住居址を確認できなかった。

石器の中に漁具（石錘等）が含まれていることから、往時は油川町はもちろん、青森平野の大部分は海水に浸されていて、この丘陵の低部も海中だったことが推測される。他の同類の遺跡と比較研究することによって、海岸線の推定もできるはずであるが、現状ではそこまで行っていない。（井上 久）

出土遺物

本稿は井上久先生のご好意により担当させて頂くことになった。

現在円筒式土器の地域差と編年をテーマにしている筆者にとっては非常に参考になり、またその後、昭和44年玉清水 遺跡、45年同遺跡及び三内丸山 遺跡の発掘調査が行なわれ、この二遺跡の整理が進むと、ここで提出した型式内容と編年私案が正しいか否かが明らかにされるであろう。

1. 土 器

第 群 (円筒下層d類)

a類 (図版1 - 1 ~ 2)

多くは平縁であるが、ゆるやかな波状口縁を有するものもある。口頸部は外反しない。口唇は肥厚せず、希れに口唇に竹管文・押圧縄文を加えるものがある。1には口端に斜縄文を施文している。

口頸部文様帯は3cm内外と非常に狭く、そこに押圧縄文、および絡条体圧痕文(いわゆる撚糸文と網目状撚糸文の原体押正文)のいずれか、または両方を使用して文様を構成する。竹管文が加えられることも多い。文様帯は口縁に対し直角な押圧文、または隆帯により4分されることが多い。文様には、平行な押圧文や、口縁に対し直角な押圧文を境として右、左下がりに押圧施文するものなどが多い。

胴部文様帯との境に押圧文を巡らすもの、隆帯を巡らすものがあるが、本類の隆帯は細く低いいため、他の隆帯とは容易に区別することができる。隆帯には押圧文や竹管文が加えられる。

胴部文様帯は、撚糸文や条の縦走する縄文が、またこれを巾の狭い羽状縄文で数段に区切ったものが多い。その他木目状撚糸文か、また少量ではあるが多軸絡条体等がある。使用される原体は、口頸部文様帯、胴部文様帯共に非常に細いものが使用されている。

胎土に維織を含む。器厚は7mm内外の色調は茶褐色ないし黄褐色のものが多い。焼成は良好である。

b類 (図版1 - 3 ~ 5)

口縁の波状の度が幾分大きくなり、頂部の割れるものもある。平縁の土器も多い。口頸部はやや外反する。口唇の肥厚するものも多く、絡条体圧痕文、または押圧縄文が加えられる。

口頸部文様帯巾は5 ~ 6cmと広くなる。文様はa類とほぼ類似する。

隆帯のあり方はa類と同様であるが、太い。

胴部文様帯は多軸終条体と条の縦走する縄文が多い。他に木目状撚糸文がある。使用される原体は太い。

胎土に繊維を含む。器厚は0.9 ~ 1cm。色調は茶褐色のものが多い。

第 群 (円筒上層A類)

a類 (図版1 - 6 ~ 14・2 - 1 ~ 5・4 - 1 ~ 6)

平縁の土器は希れで、多くは4ヶ所に突起を有する。突起は「へ」字状や、これを対にしたものが多い。口頸部は外反する。口唇・口端に絡条体圧痕文や押圧縄文が加えられる。希れに口唇内側に斜行縄文が加えられたものがある(図版1 - 9)

口頸部文様帯巾は5 ~ 10cmで、8cm位のものが多い。文様は主に押圧縄文や絡条体圧痕文(網目状撚糸文の原体は使用されない)のいずれか、または混用して構成される。竹管文が施文されるものもある。押圧文は平行になされるのが一般的であるが、突起下においては斜位に押圧したものが多い。また口縁の突起下には、2 ~ 3条の隆帯が「八」字状、鋸歯状等に貼り付けられている。巾の広い粘土を橋

状に貼り付けたものもある。

胴部文様帯との境には隆帯を巡らしており、口頸部文様帯における隆帯と同様押圧文を施文している。

胴部文様帯には斜行縄文が施文される。希れに羽状縄文もある。

胎土に極く少量の繊維を含むが、砂粒の混入が目立つ。器厚は1cm位のものが多い。色調は茶褐色、赤褐色、黄褐色など。焼成は概ね良好である。

図版4 - 6は文様が本類のものに類似しているが、次のb類に入れたほうが良いかもしれない。

b類(図版2 - 6 ~ 15)

口縁に4ヶ所の突起を有する。口頸部は外反する。口唇は肥厚し、押圧縄文が加えられる。図版2 - 8の口唇内側には羽状縄文が施文されている。

口頸部文様帯巾は5 ~ 10cmで、8cm位のものが多い。文様は押圧縄文によって構成されているが、図版2 - 6のように極く希れではあるが絡条体圧痕文を施文した例がある。文様は2 ~ 3条の撚紐を一組として、数段口縁に対し平行に押圧施文し、さらに各間に、先の押圧縄文に直交する押圧文を加えたものが多い。図版2 - 10 ~ 13のように押圧縄文が鋸歯状、「く」字状を呈すものがある。これはc類に類似した文様であるが、文様帯巾が広い、口縁に平行な押圧縄文の段数が多いの二点から本類とした。

胴部文様帯には、斜行縄文や羽状縄文が施文される。胎土に繊維を極く少量含むが、砂粒を多く含んでいる。赤褐色、黄褐色のものが多い。焼成は概して良い。

c類(図版3 - 1 ~ 15、図版4 - 7)

4ヶ所に弁状突起・王冠状突起を有するものが多い。口頸部は外反する。口唇は肥厚し、押圧縄文が加えられる。

口頸部文様帯巾は5 ~ 7cmのものが多い。文様は2 ~ 3条の撚紐を一組として、口縁に対し平行に2 ~ 3段押圧施文し、この間に銀歯状、波状に押圧縄文を施文するものが多い。他に撚紐を色々な形に曲げて押圧施文したものもある。図版3 - 14・15に施文された爪形の押圧縄文は、第群土器に特徴的な文様である。しかし本類の中にも鋸歯状の押圧縄文と共に、爪形文が施文された例もあり、また突起の形状、隆帯文を合せ考えた場合、本類に含めたほうが良いだろう。

突起の下に垂直に1条の隆帯を貼り付けるもの・突起をはさむような「く」字状の隆帯が多い。図版3 - 4の隆帯文は「住居」と「人」を表現しているように見受けられる。

胴部文様帯との境に隆帯を巡らしている。

胴部文様帯には斜行縄文や羽状縄文が施文される。

胎土には砂粒を多く含むが、極くわずかであるが繊維を含むものが少量ある。焼成は概ね良い。

第 群 (図版 16 ~ 20)(円筒上層 B 類)

4 個の弁状突起を有する。口頸部は外反する。口唇部が極端に肥厚するものと、そうでないものがあるが、いずれも押圧縄文が加えられる。

口頸部文様帯は突起部で約 10cm である。突起下の隆帯文は非常に複雑化し、これに沿って押圧縄文が施文されている。隆帯文や押圧縄文の間に施文された爪形の押圧縄文、または竹管文が特徴的である。

胴部文様帯との境に隆帯を巡らしている。

胴部文様は羽状縄文が多く施文される。他に斜行縄文がある。

胎土には砂粒を多く含み、ざらざらしている。器厚は 1cm 前後。色調は茶褐色のものが多い。

第 群 土器 (図版 6 - 5 ~ 7)(十腰内 式)

後期初頭の十腰内 式 (今井、磯崎 1968) に相当するもので、地文としての縄文はなく、文様は沈線で描かれている。

土偶 (図版 4 - 8)

体部上半が欠けており、残存部は 7cm。胎土には繊維の混入がみられず、砂粒を含む。

第 群土器のいずれに伴ったものかは不明である。この時期における土偶、土版の多くは、押圧縄文によって文様が描かれるものが多いが、これは沈線文と刺突文とによって描かれている。

2. 石 器

石 鏃 (図版 4 - 9 ~ 17)

全て有柄石鏃である。10・13・14 がチャート、他は頁岩。

石 匙 (図版 5 - 1 ~ 4)

石質は全て頁岩。縦型と横型がある。主要剥離面を多く残し、調整剥離はわずかしが行なわれていない。

石 槍 (図版 5 - 7)

両面とも主要剥離面が多く残されており、一部には自然面も残されている。石質は頁岩。

石 筥 状 石 器 (図版 5 - 5 ~ 6)

b は調整剥離が入念に行なわれており、主要剥離面がわずかに残されている程度である。石質は両方とも頁岩。

石 斧 (図版 5 - 9 ~ 13)

石斧は 5 本出土しており、全て磨製である。11 には擦切痕が残されている。また 9・10 には敲打痕が残されている。

石 錘 (図版 6 - 1)

河原石の両端を、両面打ち欠いている。

凹 石 (図版 6 - 2・4)

2 は軽石製で両面に凹がある。4 は擬灰岩質泥岩 (?) で、2ヶ所に研磨痕がある。

石鉞（図版6 - 3）

河原石の下端が研磨されて鈍くなっているもので、擦切磨製石斧を製作するとき切断を目的として使用されたものであろう。この種のもは、研磨された刃部の所々に打ち欠いて刃部を形成した痕跡が残されているが、これには全く観ることが出来ない。

一 出土土器の編年一

本遺跡出土土器を4群7類に分類したが、円筒式土器の編年が再検討されている現在、山内清男先生の設定した円筒下層d式から上層B式まで間断なく出土していることは、注目されることである。

当概時期については、周知のように山内先生により下層d式 上層A式 上層B式という編年が与えられ（山内 1929）大和久震平氏は上層B式を二分して上層C式を設定した（大和久 1960）。また大和久氏はこれに先だち、下層d式に後続するものから上層B式までを3段階とし、狐岱式と仮称した（大和久 1957）。一方江披輝弥先生は蟹沢遺跡（江奴・笹洋・西村 1958）、石神遺跡（江坂 1970）等の発掘結果から、大和久氏とは別に、円筒下層d₁式 d₂式 上層A₁式 A₂式としてそれぞれの型状を細分されたが、その基準に不明な点が多く、また一部に混乱がみうけられる。

現在のところ、青森県の津軽・北海道地域の円筒下層d式が細分されることを示しているのはサイベ沢遺跡（児玉・武内・大場 1958）である。北海道における円筒下層式土器の編年では、サイベ沢 式が円筒下層C式に、サイベ沢 式はd式に対比されている（吉崎 1965）が、サイベ沢 式はともに下層d式で新旧の二型式であることは、口頸部や胴部文様からして間違いない。サイベ沢 式が円筒下層d式に対比された規準は木目状撚糸文の伴出であろうが、これは文様の伝播が円筒式土器分布圏内においても時間的差異のあったことを示している好例である。以上のことから野木和 1a類はサイベ沢 式に、同 1b類はサイベ沢 式に対比される円筒下層d式の、新旧の二型式である。

野木和 1a類は、これまで多くのものが上層A式として、一部は下層d式として考えられていたものである。これに対比されるものはサイベ沢 式と、仮称狐岱2式である。江坂先生は石神遺跡の報告において、野木和 1a類の一部と 1b類をもって円筒上層A₁式としているが、前述した二遺跡の例から独立した一型式として認めることが出来よう。ただ狐岱2式は上層A式に対比されているが、従来上層A式の特徴とされていた野木和 1c類の押圧鋸歯状文や野木和 1b類に特徴的な文様は含まれておらず、逆に上層A式が細分されることを示す好例である。

野木和 1a類は前述したように上層式に含まれる一型式であるが、円筒式土器における大別規準については明確にされていない。山内先生は縄文の回転方向について、大木式土器分布圏では前期が横位回転施文を、中期では縦位回転施文を採用しているが、円筒式土器分布圏ではいずれも横位回転能文で変化は観られないという（山内 1930）。山内先生の円筒下層式土器における縄文の回転方向に関する観

察は、青森県南地方の中居遺跡（山内 1929）によるものであり、青森市周辺、津軽地方、北海道などの地域では、縄文の横位回転施文はほぼ下層b式までである。その後は、下層b式またはそれ以前に始まった条を縦走させる斜位回転施文方法が最も多く採用され、横位回転施文が胴部文様帯全面に及ばされることは、羽状縄文を除けば非常に希れである。しかし野木和 a類になると、野木和 a類の多軸絡条体、木目状撚糸文の絡条体および斜位回転施文による縦走する縄文から、横位回転施文の斜行縄文へ全面的に変化している。また縄文の回転方向の変化だけではなく、円筒下層式の各時期を通じ多種多様な絡条体が、口頸部、胴部の両文様帯に施文されてきたが、野木和 a類以降胴部文様帯に施文されることはほとんどない。

野木和 a類では口頸部文様帯に絡条体の使用が目立つが、押圧施文であって回転施文ではない。絡条体の回転施文もまた、縄文の斜位回転施文方法と同様、ほぼ野木和 b類と a類を境として消滅している。これらの変化は、山内先生が否定していたにもかかわらず（山内 1929）、繊維混入の有無をもって前期と中期の大別の根拠とする一般論よりも、更に明確な板拠である。つまり野木和 a類は、口頸部文様帯に下層式の所産である絡条体圧痕文を多用しているが、口唇部の発達、口縁突起の発達、隆帯文の発達とともに、縄文原体の種類と回転方向の変化等から、中期初頭に位置付けられるものである。

前述した大別の板拠は津軽、北海道等の地域についてほぼ当てはまるものである。ただ北海道では、多軸絡条体等絡条体の回転施文方法は幾分残るようである。また県南地方では縄文の回転施文の変化は観られないが、絡条体回転施文の消滅や、羽状縄文の使用が減り、逆に斜行縄文への変化が観られる。今後、資料が増すと明確になろう。

野木和 b類は、江坂先生の上層A₁式にほぼ相当するものであり、筆者も野木和 a類に後続する一型式であろうと考えてはいるが、未だにその内容を把握し得ないでいる。

野木和 c類は、従来の円筒上層A式から野木和 a、 b類を除いたものである。江坂先生の上層A₂式に相当する。

野木和 群は円筒上層B式であるが、これに特教的な爪形の押圧縄文が施文されたもの全てを上層B式として良いか否かは、大和久氏同様筆者も疑問である。

以上述べたように、型式として一部不明なものもあるが、各類はそれぞれ一型式をなし、また連続的な変化を示していると考えられるものである。

本部長ごくわずかであるが、円筒式土器の地域差についてふれた。地域差についてはこれまでほとんど研究が進んでいないが、特に円筒下層式土器の時期は幾つかの細分布圏に分かれ、また各細分布圏の強い伝統に立脚して変遷していることは明らかである。今後その差異と伝統、地域間の交流を考慮していくことが必要であろう。

（青森県立郷土館準備室 主事 三宅徹也）

引用文献

- 今井富士雄、磯崎正彦 1968 十勝内遺跡、岩木山一岩木山麓古代遺跡発掘調査報告
江坂輝弥、笹津備洋、西村正衛 1958 青森県蟹沢遺跡調査報告 石器時代5
江坂輝弥編 1970 石神遺跡、森田村教育委員会
大和久震乎 1957 北秋田郡森吉町米内沢 狐岱遺跡調査報告
大和久震平 1960 山本郡八竜村萱刈沢貝塚発掘報告書
児玉作左衛門、武内収太、大場利夫 1958 サイベ沢遺跡
山内清男 1929 関東北に於ける繊維土器史前学雑誌1 - 2、1967 先史考古学論文集
第二冊、1930 斜行縄文に関する二三の観察 史前学雑誌2 - 3、
1967 先史考古学論文集第五冊
発掘指導及び本文執筆 井上 久
編集校正 塩谷 隆正
実測拓本指導及び出土 三宅 徹也
遺物の執筆
写真撮影 中村 正稔
測量 中川 秀夫
庶務 青森市教育委員会事務局
社会教育課

野木和遺跡発掘参加者一覧

青	森	高	部長	三宅	正一	他	11名
青	森	工業	高	〃	高村	盛信	他 3名
青	森	商業	高	〃	越田	健	他 9名
青	森	一	高	〃	川村	敬三	他 11名
山	田	高	〃	蝦名	幹彦	他 9名	
青	森	西	高	〃	米谷	ひろ子	他 7名

延 174名

先輩諸氏

(青高) 中川秀夫・工藤正一、(青工高) 三上賢逸・田島悦郎・太田

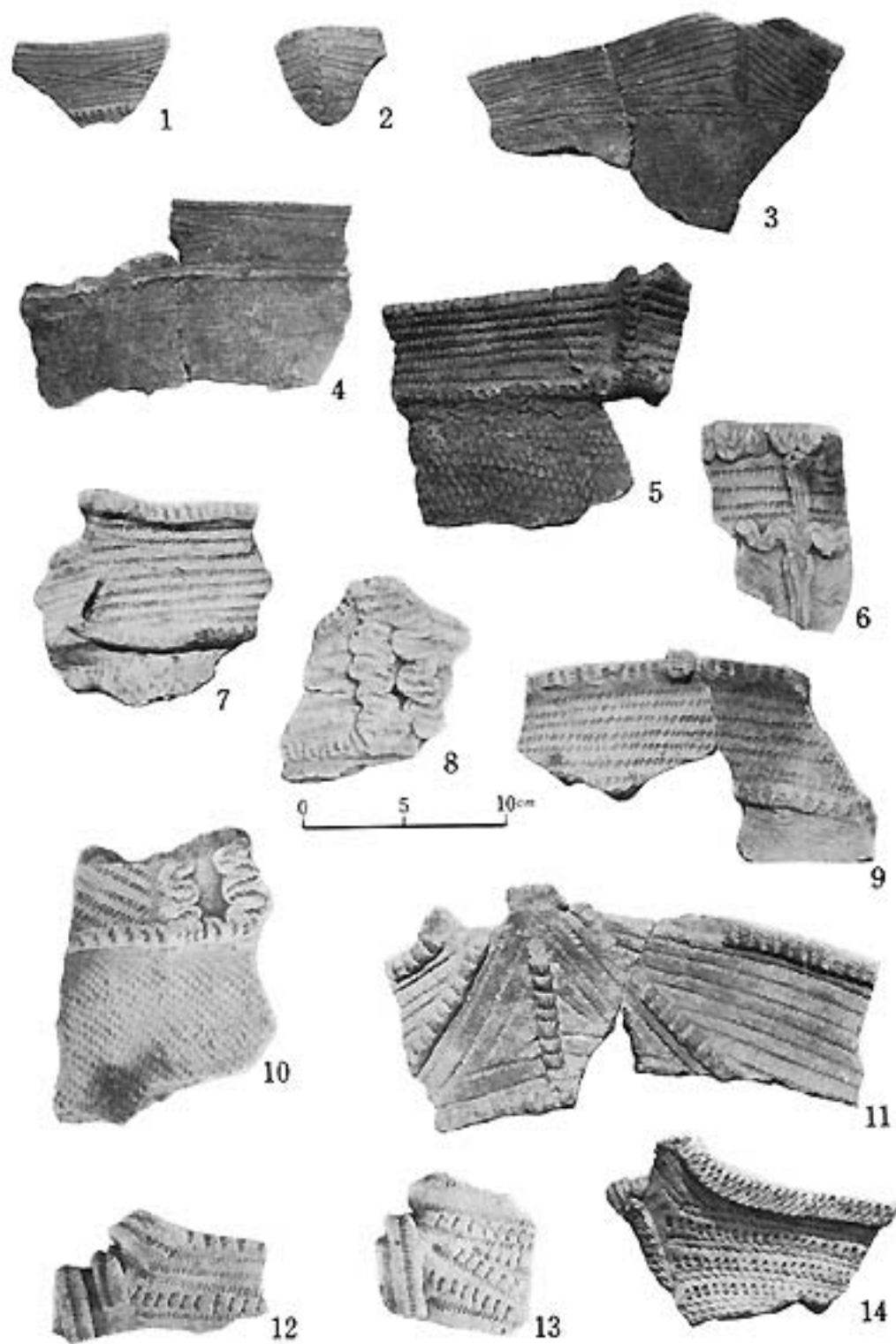
(一高) 水田政雄・蒔苗三郎・小野武志・藤本次郎吉、(中央高) 工藤正子・大矢

(西高) 副田順子

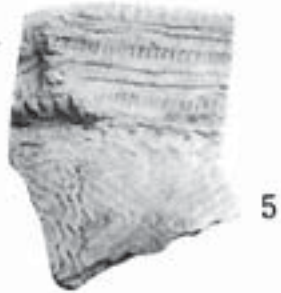
市教委事務局

社会教育課長	福井	平内
〃 補佐	溝江	昭
〃 係長	長尾	雅裕
社会教育主事	斎藤	直
職員	秋村	トシ
〃	塩谷	隆正
〃	中村	正稔

图版 1



図版 2



图版 3



图版 4



图版 5



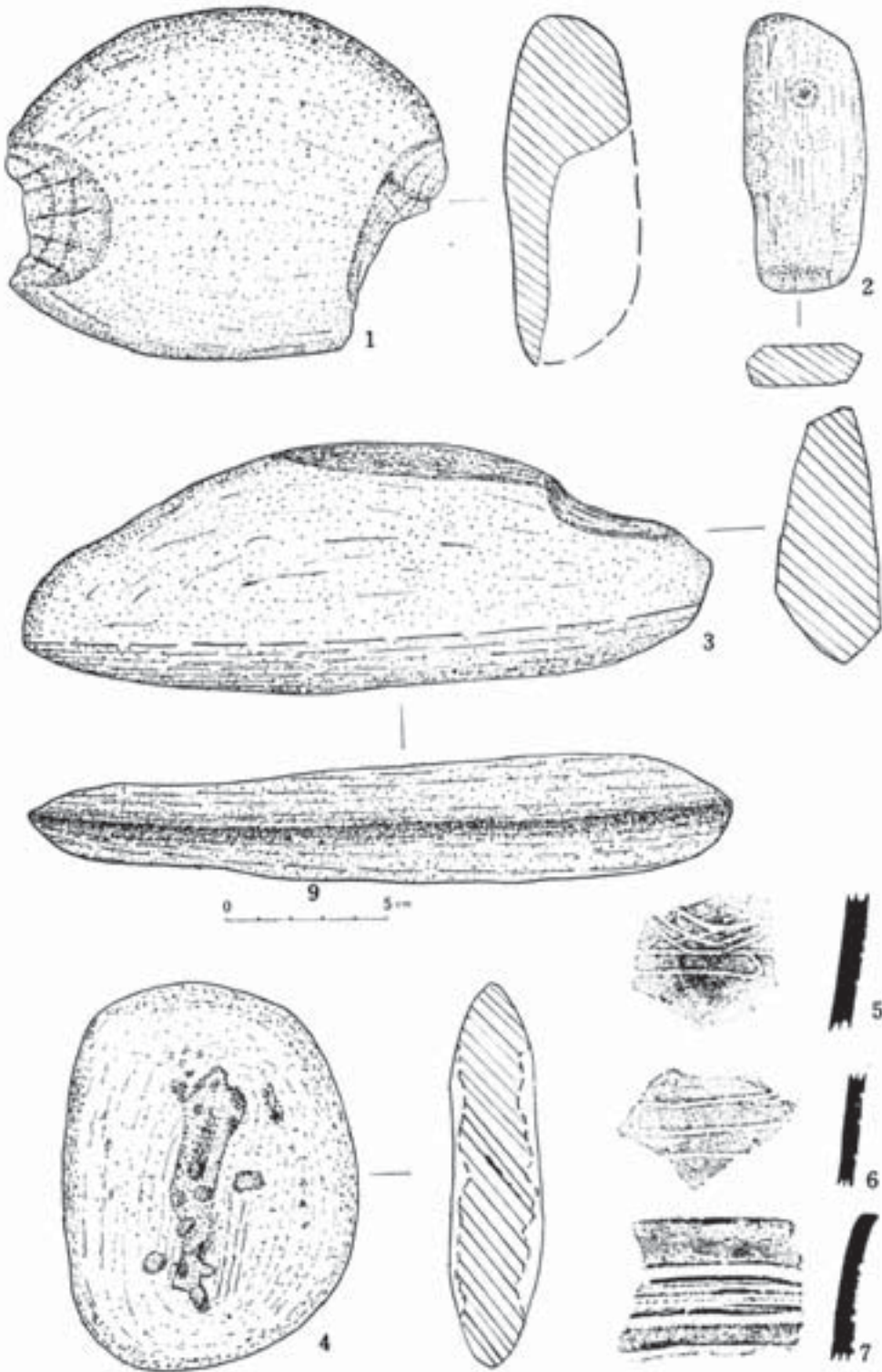


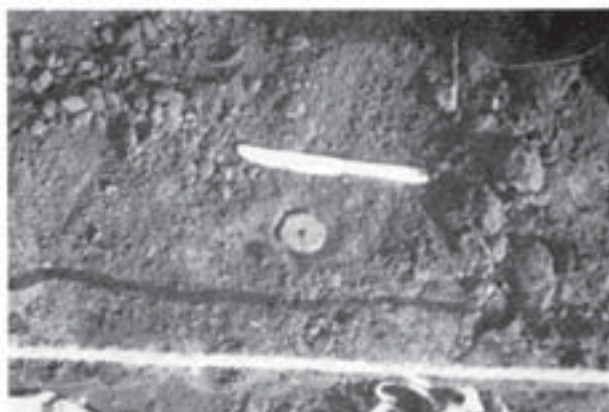
写真 1



市立油川小学校生徒の見学風景
未来の考古学者が生まれるか？



発掘実測状況

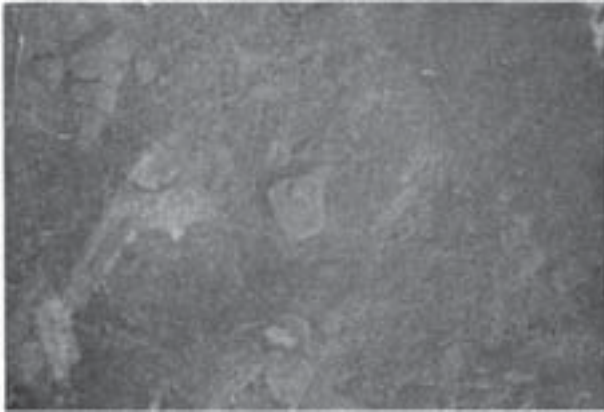


有孔石器出土状況

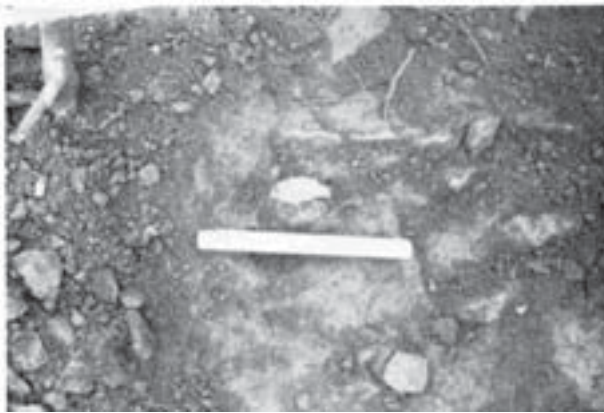


加工軽石（うき？）
出土状況

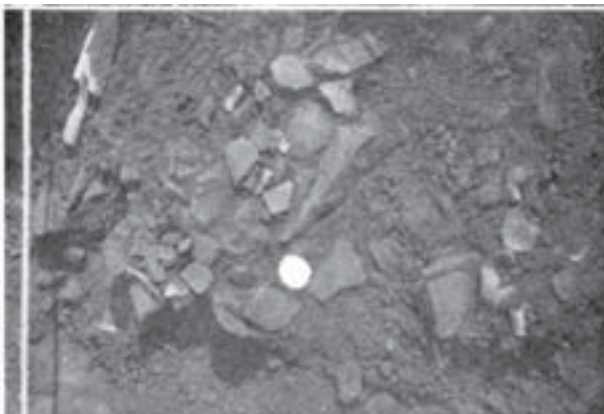
写 真 2



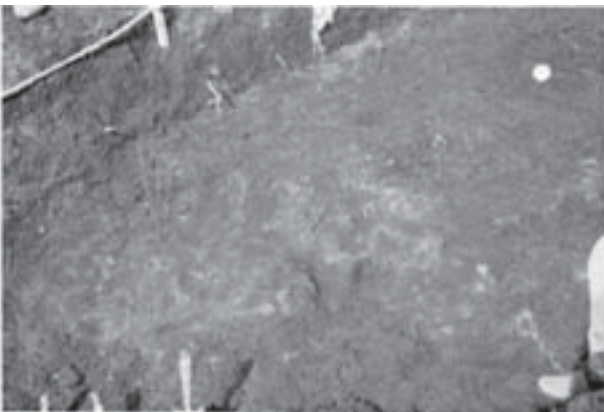
土偶（図版 4 - 8 ）
出 土 状 況



石匙（図 5 - 2 ）
出 土 状 況



土器（中央は図版 4 - 6 ）
出 土 状 況



発掘 4 日目 問題となった
粘 土 の 床 面

青森市の文化財 5
野木和遺蹟調査報告書
昭和 45 年 3 月 31 日

発行所 青森市教育委員会
印刷所 株式会社 誠工社